産学連携 Project-Based Learning PBL

九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

REC
Robert T. Huang Entrepreneurship Center of Kyushu University
九州大学 ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター

Project Theme

2017年度『産学連携PBL』は、**「VR/AR等の仮想現実テクノロジーを活用して、重要な社会課題を解決するビジネスソリューションを提案せよ」**というテーマのもとにプロジェクトを実施しました。

Contents

学習目標　Learning Objectives　02

問題意識と目的　Designing a Problem Worth Solving　03

教育哲学　Teaching Philosophy　05

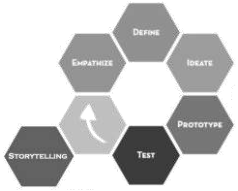
プログラム全体の流れ　Overall Schedule　06

プロジェクトの流れ　Progress of the Project in 2017　07

- Kick Off – Getting Ready for Fieldwork　07
- Downloading – Video-Prototyping　08
- Rehearsal – FINAL PRESENTATIONS　09

受講生の声　Voices of Participants　11

Learning Objectives
学習目標



スタンフォード大学d.school仕込みのデザイン思考メソッド

プロジェクトを通じて、米国スタンフォード大学 d.school発祥の
『デザイン思考』にもとづいたイノベーション創出法を修得します。

多様性からイノベーションを見出す創造的ワークショップ

さまざまな経験、人脈、専門性をもつ学生と社会人が混成チームを組み、
多様なアイデアをぶつけながら創造性を高め合うスキルを学びます。

目標を示して周囲を巻き込む、“権限なきリーダーシップ”

はっきりした答えが見えない中でもチームが進むべき方向性を示し、
周囲を巻き込んでプロジェクトを前に進めるリーダーシップを身につけます。

「課題解決」以上に「課題発見」が求められる時代の次世代リーダー育成

『産学連携PBL』のプログラムは、デザイン思考にもとづく
“課題発見”のためのスキルとマインドの習得に重きをおいています。

ますます複雑さと多様性を増す現代社会にあっては、
課題に対する解決策のクオリティ以上に、
そもそもどのような課題の解決に取り組むかという課題発見力こそが、
プロジェクトから生みだされる価値に決定的な差を創り出すからです。

デザイン思考においては、ターゲットと見定めた人の立場から
テーマを掘り下げる「共感（Empathy）」が最も重要なステップとなります。
共感を通して、対象となる事象や関係者のコメントを深く分析することから、
顧客が本当に望むもの、すなわち「インサイト」を見極める（Define）。
このインサイトにもとづいて考案（Ideate）した解決策を素早く形にし、
プロトタイプ（Prototype）を顧客に直接提示して改善点をあぶり出す（Test）。
そこで得られた顧客からのフィードバックをもとにEmpathyの確度を高め、
さらにソリューションを磨き、顧客の心に響くものに仕上げていく。

『産学連携PBL』の受講生は、二ヶ月間のプロジェクトを通じて
この一連のプロセスを高速でまわしながら、組織のリソースを投資するに足る、
“真の課題”を見出す力を身につけ、次世代リーダーとして大きく成長します。

EMPATHIZE → DEFINE → IDEATE → PROTOTYPE → TEST
Design Thinking for Innovation

教育哲学　Teaching Philosophy

松永　正樹
九州大学ロバート・ファン／
アントレプレナーシップ・センター特任准教授

Masaki Matsunaga, Ph.D.
Research Associate Professor of
Communication, Leadership Development, and Entrepreneurship at
Robert T. Huang Entrepreneurship Center of Kyushu Univ. (QREC)

教育よりも、学習。

これが、『産学連携PBL』を貫く教育哲学です。

「教育」と言った際の主語・主体はそれを行う者、
イコール教師となります。そのため、教師が
所定のコンテンツをカバーすればそれで自己完結
することができてしまう、という面もあります。

しかし、本プログラムの主体は、
あくまでも受講生であり、
彼女ら彼らの成長、すなわち
「学習」がなされたかどうかが
プログラムが成功したか否かを決定づけます。

この哲学と、QRECのモットーである
“Learning By Doing”を指針として、
『産学連携PBL』は、受講生の
実践的な学びを引き出す場を提供します。

KYUSHU UNIVERSITY

QREC Robert T. Huang Entrepreneurship Center of Kyushu University
九州大学 ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター

プログラム全体の流れ　Overall Schedule

『産学連携PBL』のプログラムは、10月中旬～12月中旬にかけて実施されます。

授業の模様は随時Facebookページ（www.facebook.com/sangakurenkeiPBL/）で公開され、受講生同士の進捗共有と同時に学内外に向けた情報発信も行われます。

プロジェクトの流れ（2017年度）　Progress of the Project in 2017

2017

10.15 **KICK OFF!**

10.21 **FUTURE SCANNING**

10.22 **GETTING READY FOR FIELDWORK**

プロジェクト
テーマの説明、
メンバー自己紹介、
アイスブレイクを
行いました。

イノベーションに
関する特別講演
プログラム連携企業
パナソニック（株）、
コネクティッド・
ソリューションズ社
IoTサイバーセキュリ
ティ事業部・室長の
松尾正克氏をお招きして、イノベーション
プロジェクト立ち上げに必要なマインドと
取組に関する特別講演を実施しました。

パナソニック
松尾正克氏の
特別講演

「チームでの働き方」に関するワークショップ
カードを用いて各自が理想とする働き方を共有
したうえで、５チームに分かれました。

未来洞察ワークショップ（10.21）
株式会社リ・パブリック共同代表・田村大氏を
講師に迎え、20年、30年後の未来から逆算して
今求められるイノベーションとは何かを探る、
「未来洞察」のワークショップを実施。

“不”を捉える力を養うワークショップ（10.22）
聞き取り調査で顧客がふだん感じている不満や
不便を見極めて、彼女／彼が本当に必要とする
ソリューションを開発するワークを行いました。

11.11 DOWN-LOADING

11.12 ISSUE REDEFINING

11.19 VIDEO PROTO-TYPING

ダウンローディング
三週間のインターバル期間中に実施したフィールドワークで得た成果をチーム内で共有。聞き取り調査から浮かび上がったターゲットの課題を解決しつつ、ビジネスとしても成立しうるソリューションのアイデアを模索するワークに取り組みました。

イシュー深耕
GOB-IP共同創業者であり、『アイデア・メーカー』著者の山口高弘氏を講師に迎え、前日のワークショップで考案したアイデアが本当に“真の課題”をとらえているかを深掘り。無意識のうちに自らに課してしまっていた制約をとり外す事で思考の枠組みを大きく広げました。

ビデオ・プロトタイピング
株式会社リ・パブリックの岡橋毅氏を講師に迎えて、これまでに磨いてきたコンセプトを、誰にでも分かりやすく伝えるためのツールとして動画を作成する「ビデオ・プロトタイピング」の手法を演習形式で学びました。

プロジェクトの流れ（2017年度）　Progress of the Project in 2017

12.10 REHEARSAL → 12.17 FINAL PRESENTATION

直前リハーサル

最終プレゼンテーション直前には、ストーリーテリングの手法を軸に何度もプレゼンテーションを行い、それを録画して見返し、改善点を探して、練習を繰り返しました。

最終プレゼンテーション＆振り返りセッション

『産学連携PBL』最終プレゼンテーションは、学外の有識者四名をジャッジに迎えて伊都キャンパスで開催されました。「仮想現実テクノロジーを用いて重要な社会課題を解決せよ」というテーマに対して、VRでの研修を通じて社会全体の意識を高め、子育てと仕事の両立を支援する、というアイデアを提案したチームが2017年度の最優秀賞に輝きました。

Learning By **Doing**

石原あぐりさん
デジタルハリウッド福岡STUDIO卒業生

——『産学連携PBL』の一番の魅力は？

多様なバックグラウンドを持つ、年代も立場も全く違う人々が同じ“場”に集まり、本気で議論できるところ。組織の立場を離れて、純粋にアイデアひとつで勝負する経験は社会人にとって特に重要だと感じた。

——どんなタイプの人に受講を勧める？

プロジェクトそのものに関して言えば、企画職が最適だと思う。一方で、職階や上下関係に頼らずチームワークをまわしていく経験という意味では、リーダーシップ研修としての効果もある。これから部下を持つ層も得るものは大きい。

貞松咲月さん
九州大学・農学部生物資源環境学科

——『産学連携PBL』で最も有意義だった経験は？

チームメイトからプロジェクト完了後にもらった相互フィードバックのコメントが特に有意義でした。自分では予想していなかった点がチームメイトからは高く評価されていたり、逆に思わぬ課題に気づかされたり…約二ヶ月間、苦難をともにしたメンバーからの言葉だからこそ自分も素直に受けとめられる。今後の成長に向けて大きな糧をもらいました。

——プログラムを通じて大変だったことは？

違いをいかに強みに変えていくか、という点が最も大変、かつ、成長できたところだったと思います。経験も専門分野もみんな違うなかで、お互いの力が噛み合うようにチームをつくるのは大変だったけど、とても良い経験でした。

——『産学連携PBL』で得たスキルとは？

イシューを見極めて、効率的・効果的にチームが動くために、段取りをつけられるようになったことですかね。社会人受講生の方々は毎日お仕事があり、学生も授業や研究で時間が限られる。“時間”というリソースを最大限に活用するためにここまでアタマを絞ることは初めてで、『産学連携PBL』ならではの貴重な経験だったと思います。

——このプログラムの一番の特長を挙げると？

受講生の誰もが強い主体性をもって参加しているところですね。「やらされ感」ゼロの環境で、ひたすらアイデアを出し合って議論していくのは本当に楽しかったです。

池澤昴輝さん
九州大学・工学部機械航空工学科

その他の受講生の声

「社外の人たちと濃密なディスカッションを交わす中で、多くの気づきや学びを得ることができた。ふだん過ごしている環境から一歩外に出て刺激を受けることの重要性を痛感した」
（連携企業社員、事業企画・製品開発 30歳男性）

「トレードオフを起点としたアイデア発想法やビデオ・プロトタイピングの手法など、ソリューションをシステマチックに検討して、高速でPDCAサイクルをまわすための思考プロセスとスキルを体得できたことがよかった」（連携企業社員、営業企画 29歳男性）

「講義で学んだデザイン思考の知識を即実践して試せるワークショップ形式がよかった。これからの仕事に直結する学びが得られた」（連携NPO法人スタッフ、25歳女性）